

若者のライフスタイル研究（3）

非行および問題行動に対する
高校生の意識と実態Ⅱ

（財）社会安全研究財団委託調査研究報告書

平成11年 3月

若者のライフスタイル研究調査委員会

はじめに

私たちは、一昨年度から現代の若者の独特な行動やライフスタイルを、彼らの対人行動を軸に、様々な視点から明らかにするための調査研究を行っている。

昨年の神戸の少年Aの事件以来、ナイフを使った少年非行があいついでいる。新聞などでは、「ふつうの少年」が突如非行に走る、突然「キレた」状態になって暴力を振るうと報道している。しかし、非行をした少年たちはけっして「ふつうの少年」とは考えられないし、全ての少年が突然「キレる」とも思えない。彼らの生育歴、とりまく環境の中に、非行の原因が隠されているに違いないと思うのである。

一方、中高生を中心にする非行は全体として増加の傾向を示している。戦後の第三のピークを迎えようとしている様相である。しかも、たとえば「オヤジ狩り」といわれる強盗事件、テレクラなどを利用した援助交際などの性を手段とした金銭・高額商品獲得への傾斜、覚醒剤などの薬物乱用といった、従来目立たなかった非行が急増している。

青少年の問題行動への対応策を検討するためには、まず青少年のありのままの姿を正確に把握することが、もっとも基本的かつ重要な第一歩であると考えられる。

本年度も、昨年度と同様の方法論により、青少年の問題行動に対する意識と実態について明らかにするとともに、その背景要因を検討するための調査研究を行った。

これらの調査結果が、今後、現代青少年の問題行動対策のための有効な資料となれば幸いである。

平成 11 年 3 月

若者のライフスタイル研究調査委員会

代表	有元 典文	(川村学園女子大学)
	大塚 由希	(野口クリニック)
	岡部 大介	(昭和女子大学)
	関口 茂	(横浜国立大学)
	宮戸 美樹	(銀座メンタルクリニック)

目次

第 I 部 質問紙調査

第 1 章 研究の概要	2
第 1 節 研究の目的	2
第 2 節 調査の枠組み	2
第 3 節 調査の方法	4
第 1 項 調査対象者	4
第 2 項 調査方法	4
第 3 項 調査時期	4
第 4 項 調査内容	4
第 2 章 結果	15
第 1 節 問題行動の実体験の有無	15
第 1 項 飲酒経験の有無	15
第 2 項 無免許運転の経験の有無	15
第 3 項 自転車やバイク窃盗の経験の有無	16
第 4 項 万引き等の経験の有無	16
第 5 項 恐喝の経験の有無	17
第 6 項 暴行の経験の有無	17
第 7 項 薬物乱用の経験の有無	18
第 8 項 性行為を伴わない援助交際の経験の有無	18
第 9 項 性行為を伴う援助交際の経験の有無	19
第 10 項 性行為強要の経験の有無	20
第 2 節 問題行動に対する意識	20
第 1 項 飲酒に対する意識	20
第 2 項 無免許運転に対する意識	21
第 3 項 自転車やバイク窃盗に対する意識	21
第 4 項 万引き等に対する意識	22
第 5 項 恐喝に対する意識	23
第 6 項 暴行に対する意識	23
第 7 項 薬物乱用に対する意識	24
第 8 項 性行為を伴わない援助交際に対する意識	25
第 9 項 性行為を伴う援助交際に対する意識	26
第 10 項 性行為の強要に対する意識	26

第3節 友人の問題行動に対する姿勢	27
第1項 友人の飲酒行動に対する姿勢	27
第2項 友人の無免許運転に対する姿勢	28
第3項 友人の自転車やバイク窃盗に対する姿勢	28
第4項 友人の万引き等に対する姿勢	29
第5項 友人の恐喝に対する姿勢	29
第6項 友人の暴行に対する姿勢	30
第7項 友人の薬物乱用に対する姿勢	31
第8項 友人の性行為を伴わない援助交際に対する姿勢	32
第9項 友人の性行為を伴う援助交際に対する姿勢	32
第10項 友人の性行為強要に対する姿勢	33
第4節 飲酒行動における実態と意識との関連について	34
第1項 飲酒行動の実態と性別との関連について	34
第2項 飲酒行動の実態と飲酒行動の価値観との関連について	34
第3項 飲酒行動の実態と飲酒行動をする友人に対する姿勢との関連について	34
第5節 各種問題行動における被害状況について	35
第6節 「非行」に対するイメージについて	36
第1項 不良少年・非行少年のイメージなどについての自由記述結果	36
第3章 まとめ	40
第1節 問題行動の実態と意識	40
第2節 問題行動と友人関係	42
第II部 グループインタビュー	
第1章 調査の概要	45
第1節 調査の目的	45
第2節 調査の方法	45
第1項 調査対象者	45
第2項 調査方法	45
第3項 調査時期	45
第2章 結果と考察	46
第1節 言説の運用により規定される「不良」	46
第2節 「普通」というアイデンティティの構築	51
付表	54

第 I 部

質問紙調査

第1章 研究の概要

第1節 研究の目的

近年、青少年における問題行動の増加は著しく、大変深刻な状況にあるといわれている。例えば、オヤジ狩りと称される強盗行為や、テレクラ等を利用した援助交際などの性を手段とした金銭・高額商品獲得への傾斜、覚醒剤やマリファナ等の薬物乱用、等々、一般の成人には理解しがたい問題行動が表面化している。そうした問題行動は、単独で行われるよりも、集団で行われる割合が非常に高いという。

現代青少年の示すそれら問題行動の背景には、若者全般のライフスタイルや道徳観念、対人関係の変質が想定されるが、その関係軸を様々に設定し、調査・分析を行うことで、そうした問題行動の理解を進める必要がある。

また、テレビや新聞等のマスメディアでは、そうした問題行動が中高生など青少年においてはあたかも一般的な行動であるかのように報道されている。しかしながら、それは青少年の実態を正確に捉えたものであるのだろうか。

青少年の問題行動への対応策を検討するためには、まず青少年のありのままの姿を正確に把握することが、最も基本的かつ重要なことであると考えられる。

本研究では、問題行動に対する青少年の意識と実態について明らかにするとともに、さまざまな背景要因との関連を検討することにより、現代青少年の問題行動対策のために有用な一資料を得ることを目的とする。

昨年度の調査では、「等身大の高校生」を理解するために、グループインタビューによって資料を収集した（結果については昨年度の調査研究報告書を参照していただきたい）。

本年度は、昨年度の面接調査結果にもとづいて、さまざまな背景要因を設定した質問紙を作成し、大規模な質問紙調査にむけての予備的な調査を行うことを目的とする。

第2節 調査の枠組み－質問紙の作成－

本調査では、青少年の問題行動に関する心理学や社会学の知見、および面接調査の結果をもとに、問題行動発生モデル(図I-1)を設定したうえで質問紙を作成した。各要因の概要については以下の通りである。

まず、環境的背景としては、家庭環境(家族構成や親の養育態度、親子関係状態など)、経済状態(バイトによる収入や親からの小遣い)、学校環境(授業に対する態度や教師との関係など)、仲間関係(仲間関係の有無や関係性)などを取り上げた。これらの環境的背景は高校生個人の心理に影響を与え、その心理が問題行動に対する意識や経験に影響するというプロセスが考えられるためである。またその他に、我が国の社会全体における価値観の多様化など社会的背景もモデルには含めてある。この要因については質問紙による調査では測定することが困難な側面であるため、調査項目には織り込んでいない。が、決して見逃すことはできない影響力を持っている背景要因である。

次に、問題行動を起こすきっかけについて、状況的背景と心理的背景を取り上げた。これは、たとえ個人のパーソナリティが問題行動を起こしやすい傾向を持っていたとしても、促進要因が存在しないとでは、実際に行動を起こすに至る割合がかなり違ってくるものが考えられるためである。こうした考えをふまえて、状況的背景としては、仲間や他者からの勧誘・強要などを取り上げた。また心理的背景としては、空虚感、充実感のもちにくさ、孤立の怖れからくる周囲への同調など、現代青年に特徴的な心理特性を取り上げた。

最後に、個人の人格特性である。現代青年の特徴として、欲求不満耐性の低さ、自己中心性、道德規範のなさなど、自我の未熟化傾向が多くの研究において指摘されている。非行との関連が強いことも明らかになっているこれらの特性を、個人の人格特性として取り上げた。これは、実際に問題行動を起こすかどうかは、環境的背景、あるいは心理的背景のみが規定要因となるのではなく、それらの背景、ならびに行動を持つ主体である個人の人格特性とが絡んだ複合的な要因によって影響されると考えられるからである。

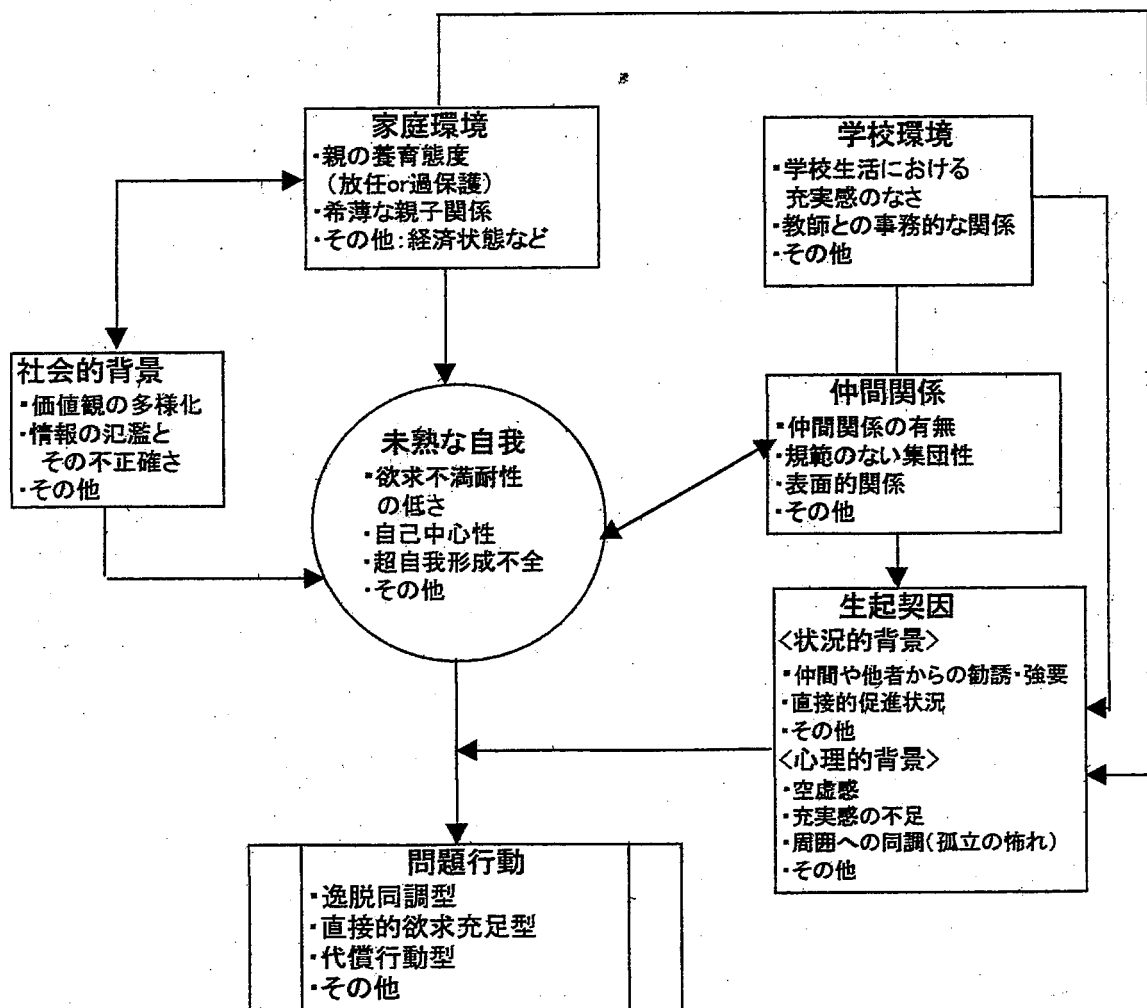


図 I - 1 問題行動発生モデル